

## 大阪中央病院の歩み

医療法人伯鳳会 大阪中央病院

院長 根津理一郎

### 【概要】

昭和19年10月1日、健康保険組合連合会が大同生命保険相互会社直営の「大同病院」を買い取り「健康保険組合連合会 大阪中央病院」として開院しました。その後、医療のニーズや医療技術の進歩に対応すべく施設の拡充を図り、2000年（平成12年）6月には現在の大阪駅西、大阪ガーデンシティに新築移転し、地域の都市型中規模病院として高度な医療技術と最新の医療設備により、質の高い医療サービスを提供してまいりました。

2020年（令和2年）7月より経営主体は健康保険組合連合会から医療法人伯鳳会となり、これまで培われた特徴ある都心の急性期病院としての機能を礎に、効率性を備えた民間病院としての新たな歴史を築きつつあります。

### 【病院の歩み】

健康保険組合連合会（健保連）が健康保険法に基づく公法人として発足したのは昭和18年のことであり、大阪中央病院はその翌年の昭和19年に大同生命保険相互会社直営の「大同病院」（昭和3年開設 松岡武次郎院長）の施設および松岡院長以下、全従業員を引き継ぐかたちで開設されました。当時進んでいなかった保険診療の普及を主目的として、また当時は戦時下でもあり、医療施設が不足していたため、医療保険団体である健保連としても医療の充実に量的な面でも寄与することを目的として、自ら医療機関を運営することになりました。

病院は大阪市北区曾根崎2丁目に位置し、内科・外科・産婦人科・耳鼻咽喉科・小児科・眼科・放射線科の各科、全110床からなりましたが、昭和20年6月には2回にわたる戦火により木造建物の3分の2焼失、残り3分の1（鉄筋棟）は壁、ガラスが剥落して甚大な被害を受けました。翌年、昭和21年11月には初代 松岡院長の辞任に伴い、二代目院長として 林茂雄博士（前 大阪大学医学部講師兼付属医学専門部教授）が就任、以降昭和60年に退官するまで40年にわたって院長として病院の発展に尽くされました。

昭和24年には皮膚科、泌尿器科、歯科が新設され、病床数も120床に増床、さらに昭和36年には開院当時の南館に加えて北館（地上4階・塔屋1階）が新設され、病床数も312床に増床されました。昭和48年には整形外科が新設され、昭和55年には手術棟改築、病棟増改築の結果、病床数は290床（ドック12床を含む）となりました。その後土地柄もあって小児科休診、産婦人科は産科を閉鎖して婦人科のみとなりました。平成8年には第5代院長として 正岡 昭 名古屋市立大学名誉教授が就任、翌年平成9年には待望の新病院開設が許可されました。

新病院は同じ北区ではありますが繁華街である曾根崎の地から大阪駅西側の再開発地区、大阪ガーデンシティに新築移転することが決定されました。名前は同じでも病院として今までとは違うコンセプトで急性期・都市型病院としてハード面でもソフト面でも全く新しい病院作りを計画しました。新しい医療機器（MR、心カテ装置、電子内視鏡など）の導入による医療レベルの向上はもちろんのこと、診療面ではオーダーリングシステムを導入し、さらには健康管理センターでの健診を充実させ、医療サービスの向上をめざしました。

平成11年、新病院開設が進む中、大阪市北区医師会と病院の連携（病診連携）のため大阪市北区病診連携委員会（委員長 岡村平太 北区医師会長）が結成され、これを機に当院でも地域医療連絡室を新たに設置しました。

平成12年3月に新病院は完成し、6月4日には入院患者52名を移送し、6月5日開院となりました（232床）。平成14年5月に正岡院長は退任、第6代院長には 大橋 秀一 前大阪大学内視鏡外科学講座教授が就任し、新病院にふさわしい構造改革と診療体制の整備を進めていきました。大橋院長は内視鏡外科という新しい外科治療学分野のパイオニアであり、平成9年（1997年）には内視鏡外科を専門的に研究する本邦初の教室として大阪大学医学部に開設された講座の教授を務めた後、当院に就任してからはその研究成果を実際の一般臨床で実践するべく泌尿器科、婦人科とも力を併せて積極的に低侵襲の鏡視下手術、ロボット手術（平成25年6月に手術支援ロボット「ダヴィンチ」導入）に取り組み、適応疾患の拡充に努めてきました。

さらに診療面では、循環器内科、消化器内科の独立、内科週末短期入院制度の確立、麻酔科、皮膚・形成外科の開設、女性外来の創設（体外受精開始、女性尿失禁を中心とした女性泌尿器科の開設）など、種々の改革、整備を進めてきました。

一方、健保連の政策提言に資するという意義から、平成16年7月には健保連が推進してきたDPC（診断群分類別包括評価）の試行適応病院となりました。また予防医療の観点から健診部門にもこれまで以上に力を注ぎ、受診者数が毎年総数で3%前後の増加を続けたことを受け、平成19年および平成25年には病

棟フロアを改装し、健康管理センターに転用して3フロア構成とし（病床を143床まで削減）、コロナ前の2018年には年間総受診者数73,000人、人間ドック受診者数14,000人にまで達しました。

時代は令和となり、令和2年7月から経営主体は三四半世紀余り続いた健保連から医療法人伯鳳会となりました。医療法人伯鳳会は保健・医療・福祉を業務とする伯鳳会グループ（古城資久理事長）に属しており、長年幅広く地域に根差した活動を行ってきました。グループは10の病院を中心として、診療所、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、各種通所施設、身体障害者授産施設、医療専門学校など60を超える事業所を運営しています。グループの展開する地域は、兵庫県赤穂市、姫路市、明石市、神戸市、尼崎市、大阪市、埼玉県、東京都と8地区にわたります。グループ共通の基本理念は「平等医療、平等介護」であり、「医療介護を必要とする方へ、必要な医療介護を過不足なく、適正な価格で、快適に適時提供する」ことを使命としています。

当院が伯鳳会グループの一員に加わって1年半余経ちましたが、急性期病院激戦区である北区にあつて、特徴ある先進的医療を提供するために、早速令和3年1月には人工関節手術におけるロボティクス手術支援システム「Makoシステム」を導入、また令和4年1月には最新のMRI、CT機器更新を行

いました。

これまで培われた特徴ある都心の急性期病院機能を礎に、効率性を備えた民間病院としての新たな歴史を職員一同、力を併せて築いてゆく所存です。

今後とも宜しくご支援いただきますよう、お願い申し上げます。



大阪中央病院\_\_MRI



大阪中央病院\_\_CT